

が読んだ方がわかりやすいのではないかと思います。今回は久米明さんに解説を読んでもらいました。

これらの6つのパターンでつくったわけです。今回はこれら6つつくりましたが、どれが一番いいか悪いかという趣旨ではございません。こういうつくり方もあるのではないかと。従来の、スタジオでつくるワンパターンだけではなくて、制作者も出演される先生方ももう少しいろいろ考えてみられるのではございませんか、という発題であります。皆さんから、いろいろ批判、ご意見もいただきたいというねらいでございます。

司会 これから、「宗教理論と宗教史」——「第12回 死後の世界—更国と地獄」——の通し番組のうちで、ざっと10分から15分の部分について6つの違ったタイプの番組をつくっていただき、その意図を伺ったわけです。きょうこれから見ていただく順番は、(1)スタジオ講義、(2)教室中継（一台のカメラ）、(3)教室の中継（3台のカメラ）、(4)現場中継、(5)ドキュメント風（講師ご自身によるお話）、(6)ドキュメント風（声優によるもの）。こういう順番で見させていただきます。

番組視聴（映像表現の多様性と伝達機能）

司会 大変興味深い、また、めんどろな実験の、いわば実験動物になっていた柳川先生に、ご意図と表現ということについて忠話を伺いたいと思います。

主任講師の意図

柳川（東京大学） 大変見苦しい顔を何遍も出しまして、また、内容も似たようなもので、それから、私の声は、学生にいわせますと、聞いて眠くなるような声だともっぱらの評判でございまして、大変恐縮でございました。いろんなタイプのものに、文字どおり出演させていただきまして、大変勉強にもなりました。その感想め12ページのところに大体まとめておきました。

(注1) 私は、実験番組としての「宗教理論と宗教史」に15回にわたりまして出させていたことがありましたので、「スタジオ形式」が一番楽でございました。これは台本が決まっておりますし、そこからはみ出た余分なことをいうと、スタッフの人を戸惑わせることになりますので、決められたとおりにやっていくということでは、これが一番楽でございました。しかし、自分の顔を見ておりますと、どうあも緊張感があるようであります。

教室での講義というのは、これは女子大でやって嬉しかったのかもしれませんが、大分なごやかな、ちょっとリラックスした顔になっておりました。そのかわり内容がどんどん横に流れてしらいまして、これはきょう全部お目にかけることができませんでしたけれども、恐らく45分なら45分の教材を全部そこへおさめることができなかつただろう。私のやっておりますふだんの講義も、やはりそういう流れのあのであるかふいう感じがいたします。

ドキュメント形式につきましては、ディレクターの方が大変なご努力でいろいろ材料を授集していただきました。中継の場所も、これも鎌倉でございしますが、やはりそれにふさわしい背景を与えていただいたと思います。けれども、もし欲を申しますと、もう少し時間がございましたら、動いているものをもう少し、たとえば「天国と地獄」というようなことでございしますと、われわれすぐ思い浮かぶのが恐山の地藏盆の日の、7月20日過ぎの巫子さんの出るような動く場面ていうものを入れたかった。また別のお祭りにしても、もっと臨場感が出せたのかなという感じはいたします。

私どもがふだんはなかなか思いつかないような苦心もありまして、水子地藏の前の子供のおもちゃの風車が、風がなくてなかなか回りませんで、実はスタッフが横で扇風機を回しておりました。今度始はてではありませんですけれども、スタジオのときもそうでございましたが、ことにロケになりますと、非常にたくさんのスタッフの方々のご協力がありますので、心を合わせてやらないといけないということを痛感いたしましたためそれから、宗教学というのは、テーマによっては外へ出ていくのがやりやすいこともあるかなという感じがいたしました。

司会 続きましてむこの実験番組の制作に当たっていただきました方から、ご説明をお願いします。